

2018年10月7日 川越教会

御言葉に守られて

丸山 勉

[聖書] 詩編 1編 1～6節

いかに幸いなことか

神に逆らう者の計らいに従って歩まず

罪ある者の道にとどまらず

傲慢な者と共に座らず

主の教えを愛し

その教えを昼も夜も口ずさむ人。

その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び

葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。

神に逆らう者はそうではない。彼は風に吹き飛ばされるもみ殻。

神に逆らう者は裁きに堪えず

罪ある者は神に従う人の集いに堪えない。

神に従う人の道を主は知っていてくださる。神に逆らう者の道は滅びに至る。

[序] 「詩編」が与えられている幸い

私たちが祈りの生活をしていく際に、「詩編」の言葉を実際に声に出し、読むことは、大きな助けになります。賛美や感謝、また逆に、嘆きや悔い改めの心など、このいにしへの信仰詩人の祈りの言葉の一つひとつを、今を生きる私たちの実存と重ね合わせて祈ることが私たちには許されていますし、また、実際にその言葉を暗誦したり、繰返し唱えること、味わうことをする中で、私たちは、いつしか自分自身が、その祈る相手の神様に捕えられていることに気付かされることもあると思うのです。

今日はその詩編1編をご一緒に味わってゆきたいと思います。ご存知のように、詩編は全体で150編の詩から成り立っています。その詩編の一番初めの言葉は、私たち人間に対する祝福の言葉から始まっています。それはヘブライ語では「アシュレー」という言葉、これは感嘆詞で書かれていて、「何と幸いな事だろうか！」といった意味です。ちなみに、詩編の最後の言葉は何かというと、「ハレルヤ！」です。神様への賛美で結ばれています。つまり、詩編は、——それは聖書全体のメッセージとも捉えることも出来ると思いますが——人間を祝福して止まない神様のみこころを告げ、その祝福を頂いた私たちが、心からその神様を賛美する、そのような神様と私たちの愛の交わりと、それへの招きを語っている、と言えると思います。

[1] 詩編1編は、素晴らしい約束の詩編

この詩編1編ですが、短い中に、二つの生き方が対照的に描かれていました。私

自身は、今はこの詩編を、他の幾つかの詩編と並んで、いつでも言えるほどに暗誦しようとしている詩編の一つになっていますが、そう思えるようになったのは比較的最近で、それ以前は、何か「**怖い詩編だな**」とっていたところがありました。

それは、この詩編があまりに厳しく響いて聞こえてきてしまっていたからでした。「**いかに幸いなことか**」と始まっているのですけれども、最後は「**神に逆らう者の道は滅びに至る**」となっています。そのような、「**幸いか滅びか**」、或いは「**祝福か死か**」といった分類、選別は、正直、私には耳に聞こえの良いものではありませんでした。

けれども次第に分かってきました。人間にとって本当に大切なこと、それは私たちの人生に神様をお迎えするか、しないのか、そのことが決定的なことなのだ、ということです。…こう考えてみたら良いのかもしれませんが。もしも神様がいらっしゃらないのなら、この世の中は、悪賢く生きていったほうが得なのかもしれません。そうではないでしょうか？—しかし聖書は、この詩編だけではなく聖書全体は、この世界を、また私たち一人ひとりを、**究極的に裁く存在という方がおられる**、ということを明確に語るのです。それは**この世界と私たちを造って下さった主なる神様**です。

そして、このお方は、6 節にあるように、「**神に従う人の道を知っていて下さる**」お方です。この「**知っていて下さる**」というのは、とても慰め深い言葉だと思います。この「**知る**」という言葉は、「**面倒を見る、見守る、養う、導く、交わる**」などといったという意味が含まれている言葉だそうです。神様が、ご自分を信じて従って来ようとする者を、どこまでも**面倒を見、守り、そのお方との関係を深く導いて下さる**、ということです。これは**慰め**であり、**素晴らしい約束**ではないでしょうか？

[2] 主の教えを愛し、昼も夜も口ずさむ

神様を信じるということ、神様に従うという生活、これは何か信心深い、特殊な人たちだけが信仰心を持てる、というように思われることがありますが、それは誤解だと思います。私たちのことを振り返ってもそうだと思います。私たちは、信心深くなってきたからクリスチャンになったのでしょうか？そうではなく、**ある時に、神様からの促しとしか思えないものを感じ、その招きにお応えした**、ということなのではないでしょうか？人間の信心の力よりも、神様からの、つまり、外からの招きの力によって信仰を与えられたのだと思います。

そして、教会に連なる生活が与えられ、2 節にあるように、「**主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ**」ようになっていかれたのだと思います。

この「**口ずさむ**」というのは、口に作る、という意味だけではなく、**繰返し思い巡らす、黙想する**、といった意味があります。「**主の教え**」というのは、トラー、直接的には神様の**掟・律法**のことを指しますが、神様の「**御言葉**」と捉えてよいと思います。私たち人間に対する**神様からの「語りかけ**」です。この「**語りかけ**」を真剣に受

け止めようとする時に何が起こるでしょうか？

同じ詩編の 119 編 130 節でこのように詩人は語ります。「御言葉が開かれると光が射し出で、無知な者にも理解を与えます。」

御言葉というものは扉のようなものを持っていて、それが開かれる時がある、と。その時に御言葉が光輝いて、“ああ、神様、そういうことだったのですね”と理解を与えて下さると言うのです。—「御言葉が開かれると光が射し出で、無知な者にも理解を与えます」。—この御言葉は、私を FEBC で指導して下さった小林八郎さんが、よくスタッフの祈り会の中で引用されていました。「御言葉打ち開ければ、光を放ちて愚かなる者を諭からしむ」と文語訳で暗誦されていました。文語訳はとてもリズムカルで、また内容も、新しい訳以上にスーッと入ってくる時がありますね。

そうです。御言葉が私たちに開かれてくるまで、口ずさむ、反芻して味わうことが、私たちの信仰の生活を具体的に支えることになるのですね。御言葉は、砂を噛むように味わいを感じられない時もありますけれども、するめイカのように噛み続けたいと思います。何故なら、イザヤ書の 55:10~11 にこのように記されています。

「雨も雪も、ひとたび天から降れば、むなくしく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え食べる人には糧を与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなくしくは、わたしのもとに戻らない」と。

御言葉は、私たち目がけて降り注いでくる、流れて来ると言うのですね。それと同じように、また、大きな「実り」をもたらすものなのだと、詩編1編の 3 節では語られていると思いました。「その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び 葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。」

イスラエルの地は、一年間の半分が乾期なので、水路を作りそのそばに木を植えないと、木は枯れてしまいます。木は動けませんから、それが実を結ぶ木に成長するためには、誰かに手によって、水路のそばに植えて頂く以外にありません。私たちもそうなのではないでしょうか？神様ご自身が、今この環境に私たちを置いて下さり、御言葉という命の流れが絶え間なく流れて来る場を与えて下さっている、神様は、私たちをそのようにして「生かそう、生かそう」として下さっているのですね。

[3] 神様はサタンの力を見抜いている

なぜ、そこまで神様は、私たちに対してねんごろにご配慮されているのでしょうか？神様は、私たちの弱さをよくご存知だからだと思います。ですから、神様は私たちには御言葉を与えて下さったのです。神様の掟、律法というものについて、私たちはそれはもう古いものだと思ってしまうことはないでしょうか。そうではないのですね。これは、私たちの信仰生活を観念的にならないようにしてくれますし、その意

味で、力となってくれるものなのです。週報にも書かせて頂きましたけれども、W・ブレッグマンという神学者が、『詩編を祈る』という本の中でこう語っています。

「ユダヤ人は、トーラー（律法）を黙想するからこそ、長く祈ることができます。霊性の中心にあるトーラーは、行き過ぎた理想主義と神秘主義と主観主義から私たちを自由にしてくれます。中心にあるトーラーによって私たちは、信仰を深め、神を知るための第一の道は服従だということを思い起こします。これらの祈りは、確信と喜びに満ちており、トーラーは命令するだけでなく保証するものでもあり、規制するだけでなく防護してくれるものでもあります。トーラーのリアリティーは、将来にも失われることのないように作り上げられています。そしてこの神の定めに従って作り上げられたリアリティーの中で、力が与えられるのです。」

トーラー（律法、御言葉）があることで、私たちは、自己本位の信仰から守られるのです。そして、これは理想主義ではなく、とても現実的、リアリティーのあるものなのだというのですね。どういうリアリティーでしょうか？—私たちの罪を見抜いているリアリティーだと思います。

1節に「いかに幸いなことか 神に逆らう者の計らいに従って歩まず 罪ある者の道にとどまらず 傲慢な者と共に座らず…」とありましたが、この描写はとても鋭いと思います。ここで書かれている罪人の姿というのは、段々と「進展」してしまっていますよね。初めは神様に逆らう者の計らい、誘惑のようなものに誘われて歩き出し、その内に歩くのを止め、そこに留まってしまって、ついには傲慢な者（神様を無視する者）と一緒に座り込んでしまう、というのです。歩き、とどまり、そして、そこに自分の座布団を敷いてしまっていると言ったら良いでしょうか、誘惑から始まり、いつの間にか身動きが出来なくされてしまうサタンの巧みな罠あるいは業が書かれています。けれども、「ああ、自分はそうだなあ」と絶望的にならないで下さい。聖書がこう書いているのは、そのサタンの力を見抜いているからに他なりません。

そして、この詩編1編では、この世界と、私たち人間に対する最終的な裁きを神様がなさる時が来るのだ、と語っています。この世の終わりの最後の審判の時だと言って良いと思います。私たち新約聖書の時代に生きる者たちにとっては、主イエス・キリストの再臨の時、と言っても良いと思います。それは確かに厳粛な時です。

その厳しさについて、詩編1編の4、5節では、こう語っています。「神に逆らう者はそうではない。彼は風に吹き飛ばされるもみ殻。神に逆らう者は裁きに堪えず 罪ある者は神に従う人の集いに堪えない。」

サタンにつく者、神様にへを向ける者は、まるで、脱穀された後、風に運ばれ、

姿を消してしまうもみ殻のようだ、と言うのです。この詩編の最後の言葉は、「**神に逆らう者の道は滅びに至る**」です。恐いですね。けれども、言い方を換えると、**神様は、この世界の悪、サタンに対して決着をつけて下さる時を必ず与えて下さる**、ということです。これを信じられるか信じられないかで、生き方が変わってくるのではないのでしょうか？

[結]「わたしにつながっていなさい」

初めの方で申しましたように、もし神様がいらっしゃらないのだったら、人間が何をしてもお構いなし、と言えるのかもしれませんが。けれども静かに考えてみると、一人ひとりが自分本位の生き方を貫いていったら、或いは、ある国家が、平和などバカバカしいと考え始めたら、この世界は滅びてしまうのではないのでしょうか。神様の審判以前に、です。**神様は、そのような人間の罪の姿を見たくないのです**。もし神様が、今すぐにでも裁きを行おうとすれば、5 節にあるように「**神に逆らう者は裁きに堪えない**」のです。

そのことを、神様ご自身が一番ご存知だったから、そして、人間を救いたかったから、ご自分の独り子を、人間の罪のいけにえとして十字架におかけになったのではないのでしょうか？ここに、**途方もない愛**があります。神様が荒れ野に作られた「水路」とはこれだと思えます。私たちは、この**愛の水路**から、神様からの語りかけ、御言葉そのものであるイエス・キリストの命を受け続けるようにと招かれているのだと思えます。

この後今日は、主の晩餐式を執り行いますけれども、主キリストはおっしゃいました。「わたしにつながっていなさい」と（ヨハネ 15:4）。イエス様は、**わたしから離れてはあなたは実はもみ殻のようなものなのだよ**、とおっしゃっているのではないのでしょうか。けれども、あなたがどんなに罪人であったとしても、わたしとつながってさえいれば大丈夫。そこからわたしのいのちが注がれるのだから。あなたは、**赦された罪人として、大胆に生きていけばよい**、と。

「(あなたは) **流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び 葉もしおれることがない。あなたのすることはすべて、繁栄をもたらす。**」と、主はこの朝語りかけて下さっています。何と幸いな事でしょうか！

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、今月は詩編からあなたのみこころをご一緒に聴くことが出来ますことを感謝致します。

わたしたちのこの人生は、もみ殻のようにはかないものなのではないでしょうか？いいえ、あなたはこんな取るに足らない者、あなたに背を向けて歩き、座り込んでしまっ

いた者に対しても、深い憐れみを注いでいて下さいます。あなたが一方的に私たちを愛して下さい、御独り子を私たちに与えて下さいました。本当にありがとうございます！

なお、自分の罪に対しても鈍感ですし、あなたの大きな愛に対しても鈍感な私たちです。けれども、だからこそ、あなたは日々御言葉で私たちに語りかけ、その御言葉が光を放って、わたしたちを諭し、また歩むべき方向と道を明るく示し、導いて下さいます。その道を歩めますことを感謝致します。

どうぞ、信仰の仲間と励まし合いながら、支え合いながら、イエス様に従っていくことができますよう、聖霊なる神様、共に歩んでください。あなたが必ず御国へと招き入れてくださる、そのお約束に立って行く事が出来ますよう、お導き下さい。

私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。